

【EYE】

阪大留学生認知症に備えるダンスに挑戦

—来るべき超高齢化時代にそなえて—

Osaka University's International Students Try a Special Dance
to Reduce the Risk of Dementia

大阪大学・高等教育入試研究開発センター・教授 三森 八重子

MITSUMORI Yaeko

(Professor, Center for the Study of Higher Education and Global Admissions, Osaka University)

キーワード：ソーシャルイノベーションとソーシャルデザイン、超高齢者社会、社会的事業、認知症、朝日新聞社、エイベックス、TRF・SAM、大阪大学

1. 超高齢化社会に備える

日本は今や「高齢化社会」から「超高齢化社会」に突入しようとしている。認知症がますます身近な問題となり我々の身に降りかかってくる。そんな中、世界中から大阪大学に学びにきている留学生20名が「認知症に備える講座とダンス」に挑戦した。大阪大学・学生会館1階の懐徳堂スタジオに2020年1月21日の午後、日本流にスリッパに履き替えた留学生20名が勢ぞろいした。

「認知症に備える講座とダンス」は2部から構成されている。最初の30分ほどは、留学生はゴーグル(Head Mount Device)を装着して、VR化された認知症の人の世界を体験する。後半の45分ほどは、エイベックス・グループ所属のTRFのダンサーSAMらが監修した認知症のリスクを低減させるダンス「リバイバルダンス」に挑戦する。

今回のイベントは朝日新聞社とエイベックス・エンタテインメントの協力で実現したもの。

「認知症フレンドリー講座」は朝日新聞社の新規事業部門が開発し、全国で展開しているプログラム。超高齢化社会に突入しようとしている日本で今大きな課題となっている「認知症」に焦点を当てて、認知症の人に寄り添う“インクルーシブな社会”の実現を目指し、一般人に認知症の世界を“実体験”してもらおうもの。



写真1 認知症フレンドリー講座で認知症を理解することの大切さを説明する朝日新聞社の
坂田一裕氏



写真2 ゴーグル (Head Mount Device) をつけて認知症の人の生活を VR で体験する留学生

「認知症フレンドリー講座」の受講生は VR を使って認知症の人が (1) 階段を下りる (2) 幻視が見える (3) 自動車を運転する一の 3 場面を “実” 体験する。

[階段を下りる VR] 認知症の人は、空間を把握する認知能力が低下する場合があるため階段を下りるときに距離感がつかめず、階段を下りるのを躊躇する場合がある。VR では認知能力が低下しているなか、躊躇しながら階段を下りる体験をする。

[幻視を見る VR] 認知症の原因疾患のうち、レビー小体型の認知症の人は幻視をしばしばみる傾向がある。VR では幻視を見る経験をする。

[自動車を運転するVR] 認知機能が低下した高齢者は距離感がつかみづらくなるため、自動車の運転に支障をきたすことがある。また、高齢者てんかんを併発している場合があり、まれに運転中意識を一瞬失うことがある。VRでは対向車にぶつかりそうになりながら自動車を運転したり、高齢者てんかんによって一瞬気を失ったりする経験をする。

「認知症フレンドリー講座」では受講生は、認知症の人が日常生活の中で直面するこれらの状況をVRを使うことで「実体験」することができる。

同プログラムを手掛ける朝日新聞東京本社総合プロデュース室・坂田一裕氏によると、このVRは、朝日新聞社が複数の認知症の人に聞き取りを実施し、その上で多数の文献を検索、独自取材を行って作ったものであり、また製作に当たっては認知症専門医である朝田隆医師（東京医科歯科大学特任教授）の監修を受けて作成したものであるという。朝日新聞社は同プログラムをすでに全国100か所以上で開催している。しかしながら、英語の通訳付きで、外国人留学生を相手に講座を行ったのは今回が初めてである。

2. 認知症リスク低減ダンスに挑戦

講座の後半では、参加した留学生はスリッパを脱ぎ捨て、人気ダンス&ボーカルユニットTRFのSAMらの監修の下で認知症など高齢期に起こる病気のリスクを低減させる目的で創られた「リバイバルダンス」を踊った。選ばれた曲は昭和の歌姫である美空ひばりの1970年代のヒット曲「お祭りマンボ」。留学生たちは、エイベックスから派遣されたダンサーMayuの指導の下、入念に振り写しを受けた後「お祭りマンボ」を一曲、一気に踊り切った。



写真3 認知症リスクを引き下げる「リバイバルダンス」に挑戦する留学生（1）



写真4 認知症リスクを引き下げる「リバイバルダンス」に挑戦する留学生（2）

ダンスを指導した Mayu は、同ダンスの動きの一つひとつに高齢者の運動機能を高める要素が盛り込まれていると説明する。

エイベックスのビジネスアライアンス本部の姫野伸介氏によると開発したリバイバルダンスの主たるターゲットが60歳以上の高齢者であるため、同年代層で人気の高い美空ひばりのお祭りマンボを選曲したという。

今回ダンスを監修したTRFのSAMらは、ダンスを使った老化予防対策に従前より関心を寄せており、2017年にはダンスを踊ることで高齢者にも元気になってもらうための「ダレデモダンス」を開発していた。今回のリバイバルダンスでは、高齢期に起こる病気の中でもとりわけ認知症のリスク低減に焦点を絞り、SAMらが専門医や理学療法士の監修のもと振り付けを考案した。

3. ソーシャルイノベーションとソーシャルデザイン

今回の試みは執筆者である大阪大学の三森八重子（高等教育・入試研究開発センター教授、専門はMOT 技術経営・技術管理）が、主として留学生を対象として開講している「ソーシャルイノベーションとソーシャルデザイン」のクラスの一環として実現したもの。

同クラスは、社会的課題を見出し、その解を探求し、実現することで社会を変革することを学ぶコースである。同コースでは非営利法人（NPO）や非政府団体（NGO）の活動、一般企業のCSRやGSV、あるいは国連が推進しているSDGsなどを幅広くカバーしており、

- ① 社会的課題への「気づき」
- ② 課題へのソリューションの「探索」
- ③ ソリューションのインプリメンテーションの「実行」

④対策のインパクトを測る「評価手法」

の4つを学ぶことを目的としている。

15週間のコースの間には、例えば京都市産業観光局商工部の筒井昭彦氏を大阪大学に招聘し、京都市が推進している「京都市ソーシャル・イノベーション・クラスター構想」についてお話を伺ったり、味の素株式会社が設立した公益財団法人味の素ファンデーションから、高橋裕典マネージャーを招聘し、同財団が西アフリカのガーナ共和国で展開している離乳食向け栄養食品「KOKO Plus」を使った乳幼児の栄養改善プロジェクトについてプレゼンを行って頂いたりもした。

またコースの最終日（第15週）には履修学生が5つのチームに分かれて独自に考案したソーシャルイノベーションのビジネスモデルをプレゼンした。

4. 祭りだ、わっしょい、わっしょい

1月21日のイベントの最後には全員が「お祭りマンボ」の歌詞の一節「わっしょい、わっしょい」の掛け声に合わせて踊り、大いに盛り上がった。

今回のイベントに参加した留学生はイベント後次のとおりさまざまな印象を語ってくれた。

<VRセッションについて>

「認知症の人が日常生活をどのように感じるのかを体験することができた。高齢者の健康にもっと注意を払わなければならないことに気づかされた」Feifan YEさん(中国)。

「認知症の人の毎日の生活が、どんなに大変で怖いものであるかを理解することができた」BÄR Jonasさん(ドイツ)。

「階段を下りる場面や自動車の運転はまるで実際に体験しているようだった。幻視は見るのがちょっと哀しかったがもちろん(認知症の人の生活を)学ぶことは重要だ」SCHRADER Peter Tobias Friedrichさん(ドイツ)。

<リバイバルダンスについて>

「音楽とダンスが記憶力の維持に大きな役割を果たしていることが分かった」HERRERA RUIZ Nohemiさん(メキシコ)。

「振付が良かったし、何より楽しかった。ダンス教師のMayuは我々留学生のやる気をうまくひきだしてくれた」SCHRADER Peter Tobias Friedrichさん(ドイツ)。

「ダンス自体とても面白かったし、ダンスを通じたほかの留学生との交流が楽しかった」Le Huynh An Thuyさん(ベトナム)。

朝日新聞社とエイベックス・エンタテインメントは、今回の「認知症フレンドリー講座+リバイバルダンス」を今後全国で展開していく。

5. 認知症はグローバルイシュー

高齢化社会はいまや日本だけの問題ではなく、グローバルな課題となっている。高齢化が進むにつれ認知症の問題も同様に、日本ばかりの問題ではなく世界で最も重要な課題の1つとなりつつある。

今回の授業では朝日新聞社やエイベックス・エンタテインメントといった民間企業が、社会の一員として社会的な課題に取り込む事業の一事例として留学生に学んでいただけたと思う。参加留学生には、帰国後ぜひ日本のリバイバルダンスを友人に教えて広めてほしいと伝えた。(了)